

無残！人妻NTR人体改造

Modify.1 両腕切断手コキ

制作／人工美少女製作所
ふあっときやっどDX

家から妻が消えた——異変に気づいたのは
会社から帰宅してからだった

いつもなら出迎えてくれる妻の姿がない
玄関は無施錠のまま、料理も途中の様だった

何か急用かと思い、待ってみることにしたが
1時間……2時間……と、時間は過ぎていく……

しかし妻が帰ってくることはなかった
通報しようと思った矢先、携帯にメールが……

——警察に言えば、妻は帰らない——

脅迫めいた一文……

私は妻が誘拐されたことを悟った——

結局、警察には通報しなかった……。それで妻を永遠に失ってしまうかもしれないからだ何か手がかりがないか家の中を探してみるが妻がいないこと以外、いつもと変わりはない気づいた事と言えば、妻の携帯がないことだ私の携帯のアドレスを知る為に持ち去った？位置情報を調べてみたりもしたが、そもそも電源が入っていないようだった

こうなると一般人の私に出来ることはない出来るのは犯人からの連絡を待つことだけだもう一度、犯人からのメールが来る可能性に賭けて、私は待ち続けた……。会社も休んで――

すると、1週間が過ぎようかという頃、私宛に荷物が届いた、キャリーバック程のサイズだ送り元は海外……。つまり国際郵便だ聞いたこともない国、調べたが無駄だった

そもそも知らない言語の為、判読不能だ内容物には「」とあるが……。なんだ？

私宛に届いた身に覚えのない荷物……。間違いなく妻の誘拐と関係がある――

そう思い、慎重に開封すると――



深冬っ……!!
深冬っ……!!

グ
ッ

はあっ……!!
はあっ……!!

グ
ッ

温かな妻の手——女性の体温が肉棒を通じて
じわりじわりと伝わり、生を感じられる……

こんな状態でも妻は、深冬は生きているのだ
在りし日の行為を思い出し、剛直を固くする

肉棒を感じたからか、妻の手もしっかりと
私の息子を握り返してくる……ああ……これは

右手で膣を、左手で子宮を表現しているのか
裏筋に当てがった、両の親指も心地よい……



おお……う……っ
いいぞ深冬う……

ニユッ
ニユッ

ニユッ
ニユッ

そのまましっかり
握っててくれっ……



しっかりと妻の腕を握り、力強く前後させる肉棒と掌が擦れ、まるで挿入しているようだ裏筋に当たる親指もヨリヨリと刺激してくるカリ首の締め付けも子宮口のように興奮する



前にセックスしたのは、いつだっただろう…。最近はずいぶんセックスレス気味だったか

ああ…。こんなことになるなら、もっともっと妻の膣内を、子宮を堪能しておくべきだった

ああ……深冬……
いい……いいよ……

ア
メ
イ
♡

舌もしっかり
使ってくれ……



幻覚だろうか？私の目に妻の姿が映る
いやらしく舌を出し、メスの顔をした妻だ……

ザラザラした舌の感触までも感じている
ねっとりとした妻の口内……吐息が伝わる



一方、やはり現実の感覚も心地よい……
左手の薬指にはめられた結婚指輪の硬い感触

それが手の動きと共にヨリヨリと亀頭を擦る
本来の役目ではないが、こういう使い方もいい

はぁ♥アナタ……
気持ちいい……？



あぁ……すごく
いいよ深冬……

——そんな幻聴も聞こえてくる
私は思わず返事を返すが、そこに妻はいない
あるのは無残に改造された妻の両腕だけ……
私は今、ソレを性処理道具として使っている

今まで真面目に生きてきたせいかな、これまで
全く感じたことのない感情……背徳感だ——

この胸に湧き上がる感情は複雑で、それ以上
言い表しようがない……なんとも甘美な——



うれしい…アナタ
出しているのよ…？

うう…深冬っ
イク——ぞっ!!



妻の許しの言葉に、私の剛直は爆発寸前——
玉袋が上がり始め、精液が来るのを感じる

瞳は幻想の妻と見つめ合う……
とろん、とした瞳……いやらしい表情だ……

加えて、最後までシゴキ切ろうとする妻の手
しかし私は、限界まで我慢し続けた——

これまでに経験したことのない、人生最高の
最高に背徳的な射精絶頂を迎えるために——





限界を迎えた私は、ついに射精した——
息子が妻の手の中で、何度も力強く脈動する

そのたびに白濁が飛び出し、妻の顔を汚す
妻は大人しく射精を受け止めるだけの便器だ

射精を続ける中でも、妻の手はしっかりと私の
剛直を握っていてくれている……

力強い射精で暴れる肉竿を手懐け、真っ直ぐ
射精を導いてくれる……私は身を任せた——





はい…
アナタ ♡

深冬っ…！そのままっ！
ギュッと握っててくれっ！！

射精は収まりつつあるが、最後の一滴まで
出し切ろうと、ビクビクと脈動を続ける剛直

妻の手は、それをギュッと握っていてくれて
いる…最後まで気持ちよく射精できるように

ピクン…ピクン…一回竿が跳ね上がるたび
私の脳内に計り知れない快感が駆け巡る…

狂ってしまいそうな感覚…射精絶頂—
永遠に続いて欲しいが、それも終わりを告げる





あぁっ…
深冬…っ

アナタっ…
あはぁっ♡

射精が終わり、肉棒が震えながら残滓を搾る
それは風船のように膨らみ、提灯を作った

私は荒く息をつき、長い絶頂の後の呼吸を
整え、涙を流す妻とジッと見つめ合った……

妻の顔をまじまじと見るのは久しぶりだ
最近の仕事ばかりで、会話も少なかったか……

最後に亀頭が二、三度震え、快感を啜り切ると
ザーメン提灯がパチンと弾け飛んだ――





— 深冬!? 深冬っ!?

ふう...ふう...ふう...

ん!?

ザーメン提灯が弾けると同時に、それまで見えていた妻の姿も消えてしまった……

声も聞こえない……残ったのは床にぶち撒けられた精液と言いたいようなのない罪悪感だけだ……

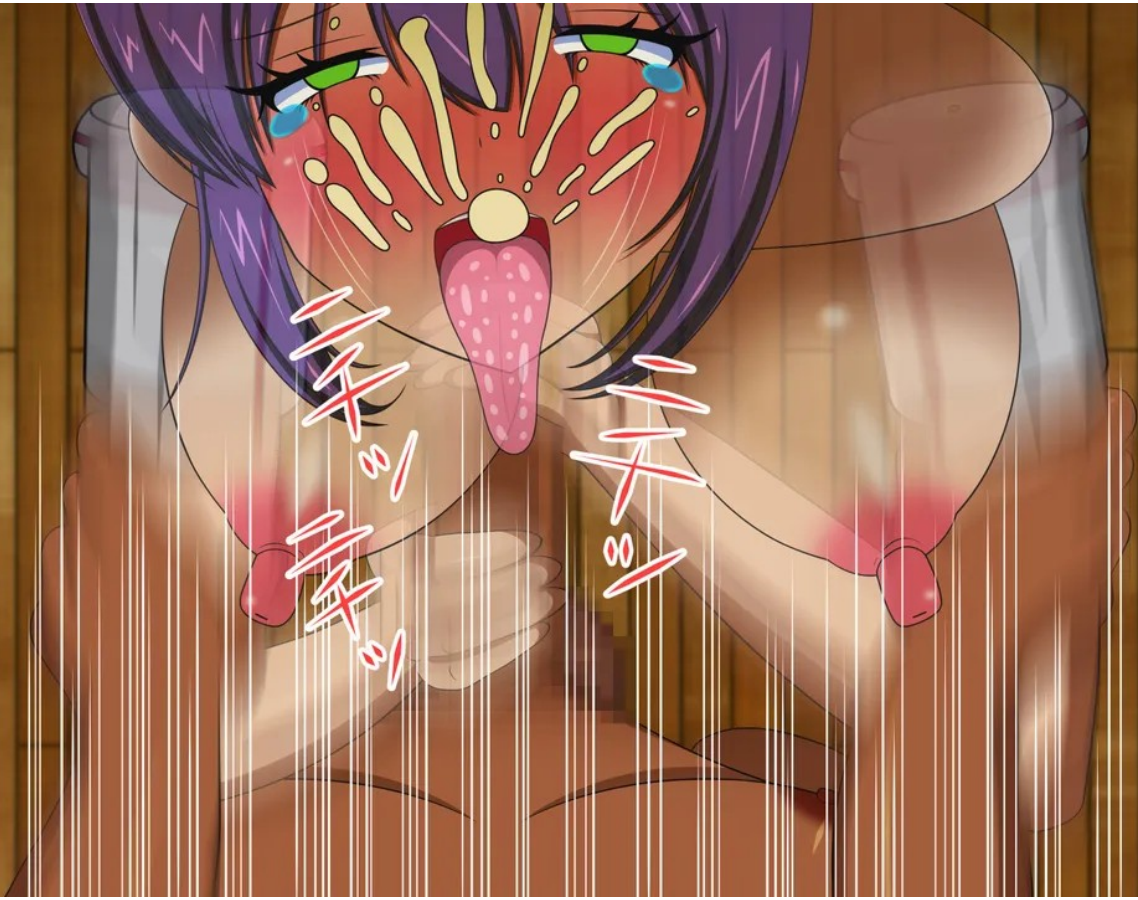
だが、そのアブノーマルな罪悪感がさらなる興奮を煽る……一発だけでは収まりそうにない

もう一度、もう一度だけ……私はまだガチガチに勃起している肉棒を慰めだした——



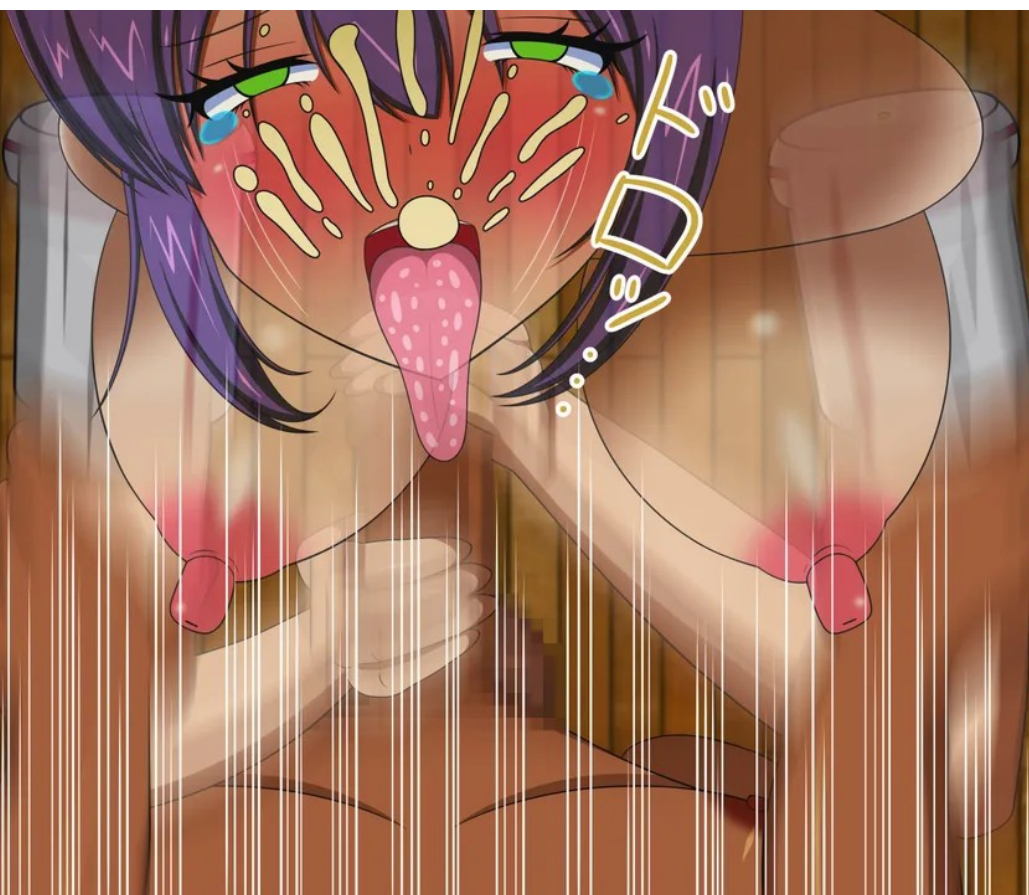
はあっ……!!
はあっ……!!

深冬っ……!!
深冬う……!!



——あれから何度射精しただろう……？
もうほとんど精液も出なくなってしまった

それでも、なぜか性感が高まっている間だけは
幻とは言え、妻に会えるのだ……何度でも……



結局、私は朝になるまで夢中でシゴキ続けた
体力が尽きるまで、完璧にシゴキ切るつもりだ

最後にはもう我慢汁すら出なくなり、達しても
肉棒が痙攣するだけになったのだった

——あれから何日経っただろう

私は毎日、ひたすら自慰に明け暮れている……

朝立ちを妻の手で処理し、その後もずっと射精できなくなるまでシゴキ続ける

腹が減ればインスタント食で腹を満たし精力が回復したところで、またシゴキ出す

できるだけ射精できるように、精力剤などもインターネットで大量に注文した

国内製のものではなく、海外製のアングラな製品だ……こちらのほうが効果が高いという

——確かに効果は抜群だった

私は体力の続く限り、一日中射精し続けた

バキバキに勃起した肉棒を妻の手がぎゅゅちり握り、何度も何度も何度も射精まで導く……

とうとう一日の終わりには、女性のように潮吹きまで行えるようになっていた

手淫のバリエーションも増え、亀頭を撫でたり玉袋を揉んだり、鈴口を穿ったりもさせた

今では尻穴にも目覚め、掌ごと穴にずっぽりと突っ込み、前立腺を弄らせて射精している

ああ……深冬……素晴らしい妻—— (つづく)